

ルイス・ビーベスとヨーロッパ

—平和思想をめぐる一考察—

木 下 登

“Pace opus est, quite, concordia, ut ingenia
excolantur, et vigeant artes.” (J. L. Vives: *De Concordia*, lib. III.¹⁾)

I. エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466-1536)、トマス・モア (Thomas More, 1478-1535)、ギヨーム・ビュデ (Guillaume Budé, 1468-1540) らとともにルネッサンス期を代表する人文主義者、スペイン、バレンシア生まれのフアン・ルイス・ビーベス (Juan Luis Vives, 1492-1540. ラテン語名 Ioannes Ludovicus Vives. 以下本稿ではビーベスと略記) は、1514年に初めての作品『神の母なる童貞マリアの受胎』*Virginis Dei parentis Ovatio* をパリで出版して以来、1540年に他界するまで、ローマ教皇や英国王らに宛てた書簡を含め、彼が生きた時代状況を如実に反映する重要な全 59 点におよぶ著作を次々に発表した。

1492年、ビーベス²⁾ はユダヤ系の新キリスト教徒を両親に³⁾、バレンシアで生を受けた。創設間もないバレンシア大学を経て、1509年、17歳でパリ大学に入学、スコラ学に基づく中世的な教育を受けた。1514年、フランドル地方に移り住み、エラスムスとの出会いを通して人文主義に傾倒。第一の本格的著作『偽論理学者弁駁』*Adversus pseudodialecticos* (1519)において、当時のパリ大学の学術傾向を人文主義の立場から批判し、エラスムスやトマス・モアから高い評価を受けた。1517年には枢機卿ギリエルモ・デ・クロイ (Guillermo de Croy) を有力な後援者として得るとともに、ルーヴァン大学の教壇に立ち、学者として輝かしい将来が約束されたかに見えたが、1521年に枢機卿を落馬事故で失った。時をほぼ同じくして、バレンシアからは父親に対しての異端審問裁判が進行中との悪報が届く。その頃、スペインの人文主義の先駆アントニオ・ネブリハ (Elio Antonio Nebrija, 1444-1522) の後任としてアルカラ大学からの招聘を受けるが、異端審問を危惧して断る。1523年、大法官ウルジーの招きで渡英し、チューダー朝宮廷の顧問に就任。ヘンリー8世とスペイン王家の出のキャサリン王妃の庇護の下、王女メアリーの教育にあたる一方、トマス・モアをはじめとする人文主義者たちとも親交を結び、彼らの社会哲学思想から深い感銘を受けた。イギリ

ス滞在を機に、それまで学術的傾向が強かったビーベスの著作は、社会性に富んだものへと変化していった。1528年、国王夫妻の離婚問題に反対の立場をとり、イギリスから永久追放の処分を受けた。イギリス滞在中、ビーベスは幾度もブリュージュに旅行。1524年、スペイン系のバウダウラ家の娘マルガリータと結婚。ビーベスの晩年の12年間はブリュージュでの執筆活動に当てられており、『学問論』*De disciplinis* (1531)、『靈魂生命論』*De anima et vita* (1538)、『キリスト教信仰の真理性について』*De veritate fidei christianae* (1543)などの代表的著作はこの時期に著された。生来の病弱な体質に加えて、度重なる貧困と不遇な境遇に悩まされた末、1540年5月6日、彼はブリュージュにて48年の生涯を閉じた。

本稿は、16世紀前半、動乱の歴史的状況の直中であって、ひたすらに「生まれて、研究して、書いて、死んだ *nació, estudió, escribió, murió*⁴⁾」とオルテガによって形容された人文主義者、ビーベスの平和思想の源泉とその特質の一端を、彼の政治的著作の中に明らかにすることを試みるものである。

II. 1992年、ビーベス生誕五百年を契機として新たな『ビーベス全集』⁵⁾の刊行が始まった。バレンシアの人文主義者、グレゴリオ・マヤンスによる初めての『全集』⁶⁾以来、実に二百年振りの壮挙である。現時点で第一巻（優れたビーベス研究論集）と第二巻と三巻（『聖アウグスティヌス『神の国』注解』）が出版されている。これと平行してバレンシア市委員会から『ルイス・ビーベス著作集』と題して、ビーベスの主な著作のスペイン語訳と研究書からなる叢書の出版も続いている。また、主として初期の著作についての校訂本ならびに英語訳が、1979年以来、ライデンより継続中でもある⁷⁾。

ビーベスの著作ならびに研究文献に関しては、ノレーニャ教授が1990年に出版した『ビーベス関連文献目録』⁸⁾が現時点では最も包括的なものである。そこに枚挙されているビーベスの59点に及ぶ全著作を大別すれば、以下の三分野⁹⁾となるが、さらに詳細な分類も行われている¹⁰⁾。

1. 学問の刷新：『偽論理学者弁駁』*Adversus pseudodialecticos* (1519)、『学問論』*De disciplinis* (1531)、『靈魂生命論』*De anima et vita* (1538)
2. 教育と社会改革：『キリスト教徒女子教育論』*Institutio feminae christianae* (1523)、『夫の務めについて』*De officio mariti* (1528)、『貧民救済論』*De subventionem pauperum* (1526)、『財産共有論』*De communione rerum* (1535)
3. 和合と平和：『人類の和合と不和について』*De concordia et discordia* (1529)、『平和論』*De pacificatione* (1526-1529)

本稿が研究対象とするビーベスの「平和論」の著作として、佐々木 孝教授は以下の作品を挙げている。

1. 『教皇ハドリアヌス 6 世への手紙——ヨーロッパの現状と騒乱について——』 *De Europae statu ac tumultibus* (ルーヴァン、1522.10.22)
2. 『イソクラテスの法廷弁論』 *Isocratis oratio Aeropagitica* (オックスフォード、1523)
3. 『ヘンリー 8 世への手紙——皇帝に捕らえられたフランス王について——』 *Ad Henricum VIII angliae regem de Francisco Gallorum rege a Caesare capto* (オックスフォード、1525.3.12)
4. 『ヘンリー 8 世への手紙——王の統治について——戦争と平和について——』 *Ad Henricum VIII de regni administratione, de pace inter Caesarem et Franciscum gallorum regem, deque optimo regni statu* (オックスフォード、1525.10.8)
5. 『ヨーロッパの騒乱と対トルコ戦争について』 *De Europae dissidiis et bello turcico —dialogus—* (ブリュージュ、1526.10)
6. 『人類の和合と不和について』 *De concordia et discordia in humano genere* (ブリュージュ、1529)
7. 『平和論』 *De pacificatione* (ブリュージュ、1526-1529)

これらビーベスの平和論全体は、年代的に見て、大きく二つに区分されうる。第一期としては、彼が 1526 年までにヨーロッパの情勢や政治を扱った 5 作品があり、それらは一まとめにしてその年にブリュージュで、『ヨーロッパの騒乱と共和国』*De Europe dissidiis et Respublica* と題され出版された¹¹⁾。またこれは、別名『ビーベス政治学大全』*Summa politica vivista* と呼ばれた。第二期としては、1526 年から 1529 年にかけての作品、『人類の和合と不和について』*De concordia et discordia* と『平和論』*De pacificatione* がある。

この時期の主要作品の分析に入る前に、彼の政治関係の著作の動因となった時代状況を概観しておきたい¹²⁾。

スペイン国王カルロス (神聖ローマ皇帝カール 5 世) を支えた基本理念は、中世キリスト教普遍帝国の再建であり、ここから彼が対抗すべき対象は、ヨーロッパ・キリスト教世界に脅威を与えていたイスラーム勢力、カトリック正統主義に挑戦するプロテスタント勢力、そして自らの上位に立つ帝権を認めようとしないフランス王権であった。フランスとの戦いは 4 回行われたが、最初の 3 回はイタリアを舞台としていた (イタリア戦争、1521-1544)。1521 年、フランソワ 1 世がナバラに侵入すると、カルロスはミラノ公国を占領し、1525 年のパヴィアの戦いでフランス軍を破り、仏王フランソワを捕虜として、翌年のマドリード条約でミラノ領有を認めさせた。釈放されたフランソワは、他の諸国とコニャク同盟を締結し、教皇もこれに参加した。皇帝軍

は大規模な「ローマの略奪」を行い、フランソワは1529年、カンブレー和約を結んでカルロスのミラノとジェノヴァの領有を認めた。ミラノ領有をめぐる1536年に再燃した戦いは1538年のニースの休戦条約で収まり、1542年に北フランスを戦場として始まった戦いは、1544年のクピレー和約で終結した。こうした動乱の時代を生きる者の使命として、ビーベスは平和論執筆に情熱を傾けた。

最新のビーベス研究史¹³⁾によれば、16世紀には、ビーベスの諸作品はパリ、リヨン、バーゼル、ルーヴァンなどヨーロッパの主要都市で出版を見た。上記のようなヨーロッパ情勢を背景にして、とりわけ政治関係の著作は多くの読者を獲得し、その数は同世紀中だけでも合計540版を数えたという。

III. 本章では、先に掲げたビーベスの平和論関係の著作の中から主要なものを取り上げて、彼の思想を読み取るための考察の対象としたい。

1. 『ビーベス政治学大全』

ビーベスが後のローマ教皇ユトレヒトのハドリアヌス・フロレンスを知ったのは、1514年、ルーヴァンに初めて滞在したときのことであった。当時ハドリアヌスはトルトサの司教職を務めていた。1507年、彼はカルロスの家庭教師を務める旨の命を受けた。また、1516年、カトリック王フェルナンドの逝去に際して、かねてから彼の娘ファナの第二子フェルナンド王子を後継者として公言していた王に遺言を変更させ、カルロス王子を後継者として擁立することに成功した。1522年、ハドリアヌスが教皇に選ばれると、ビーベスはさっそく彼に『教皇ハドリアヌス6世への手紙——ヨーロッパの現状と騒乱について——』と題した長い書簡を送った。その中でビーベスは、スペインとフランスの間の戦争やカトリック教会内における教義上の争い、トルコの脅威など、キリスト教世界が直面する諸問題について言及した。

「私を非常に悩ませることは、絶え間のない戦争や邪悪な男たちによって扇動された破壊的な動きなど、キリスト教世界が極限に至っているということです。……あなたに求められること、期待されることが二つあります。それは、君主間の戦争が鎮まること、またあらゆる個人間の騒ぎが落ち着くことです。……近年、新たな戦争形態が支配的になっています。すべてに火を放つのです。フランス人は我が国のものに放火した。今度は、勝利者である我々スペイン人がフランス人のものに火を付けた。……この悲劇的なやり取りの結果直ちに生じることは、我々が、彼らが望むところを行うという、まさにトルコ人たちを最も喜ばせることなのです¹⁴⁾。」

ビーベスはヨーロッパの混乱した現状を嘆く一方、本来あるべき勝利者、即ち、「君

主」princeps の高貴な精神性について、次のように考えを述べている。

「戦いに負けた者にとって、惨めに意気消沈する以外に何ができるというのでしょうか。ギリシア人やローマ人たちは、大胆不敵かつ無慈悲な民族を破ったのですが、不正義を乱用することは自制しました。勝利をおさめると、彼らは敵を以前よりも豊かにし、教育を与え、もっと節度のあるようにしたのです。従って、敗れた者は、勝利者となるよりも大きな利益を得ることになったのです。そのことは異教徒たちに、靈魂の不滅性を確信できない、また慈悲について一度たりと聞かされたことのない、人の系譜の源である神が彼らに共通であることを知らない人たちに、起こったことなのです¹⁵⁾。」

またビーベスは、本稿の第IV章で触れる正当戦争の解釈について次のように述べている。

「教皇さま、我々の宗教の教えによれば、あなたがこの世におけるその正当な解釈者ですが、あなたの使命は、君主たちや彼らの顧問官たちに、兄弟間のひいては同一の洗礼によって生まれた者たちとの間の戦争は不当であり、あらゆる正当性に対しても、あらゆる慈悲に対しても非道なものであることを教えることです¹⁶⁾。」

ビーベスは、目下緊急に必要なことは宗教上の和が達成されることであり、教皇庁の答えとしては公会議が招集されるべきことと進言した。また彼は教皇に、キリスト教世界と同意語でもあるヨーロッパの行く末には決して楽観的にはなれないと訴えている。

「どの時代においても、カトリック教会の騒動には我々が総公会議 Generale Concilium と呼ぶ会議が招集されたのでした。これこそ、不治と見なされた病にとって唯一の薬なのです。……キリスト教世界全体に総公会議を招集することが必要です。……この広大で悲惨なヨーロッパの和を願って、崩壊し分裂しているヨーロッパを嘆くしかないのですが¹⁷⁾。」

ビーベスが教皇ハドリアヌス 6 世に送った書簡について注目すべきことは、その書の目的である平和への危惧に加えて、彼が、その時まで単なる地理上の名前またはその略奪についての伝説神話でしかなかった歴史的現実、我々が今日ヨーロッパと呼んでいる現実を明確に認識していることである¹⁸⁾。

この書簡が教皇に及ぼした効果を推測する手段としては、次のような事実を考慮することができる。ビーベスが書簡を書いた約一ヶ月後の 11 月 17 日に、教皇はニュルンベルクで始まった議会に使節を送り、教皇庁が自らの怠慢について率直に認めると

ともに、カトリック教会における諸悪について責任をとる意志のあることを言明するメッセージを読ませた。しかしながら、その声明によってルター派を擁護するドイツの諸侯たちが姿勢を変えることはなかった。トルコの脅威に触れた言葉ですら、キリスト教諸国の君主たちを一つに結束させることはできなかった。失意の教皇は選出から一年を経ずして他界し、ビーベスが彼の人格に托した大きな期待は無残にも打ち砕かれた。1525年には、ヨーロッパの情勢はビーベスがかねてから危惧していた様相を呈するに至った。

ビーベスは、1525年、ヨーロッパの政治情勢について、ヘンリー8世に『皇帝に捕らえられたフランス王について』（オックスフォード、1525.3.12）と『王の統治について——戦争と平和について——』（ブリュージュ、1525.10.8）と題した書簡を送った。

第一の書簡は、パヴィアの戦いでフランソワ1世が皇帝カール5世の親衛隊によって捕らえられた20日後に書かれた。その中で、ビーベスは、かつて王妃キャサリンの求めにより王女メアリーの教育を頼まれたことから知遇を得ていたヘンリー8世に対して、フランスのためにカール5世に対して仲介に入ってほしい旨を訴えた。

「貴殿とカルロスが一刻も早く彼地へ使節を送り、哀れなフランス人たちを貴殿たちの名代を通して慰め、彼らに安らぎと希望を与えてくださったなら、それはどれほどの善をなすことであり、また神の眼にはどれほどの功德であり、人々からの称賛の意を受ける栄光はいかほどでありましょうか。……私がおせっかいな助言者であり、いわば突撃を始めている人にそうしなさいと勧めているということでもありますように。しかし私は、自分が貴殿に対して抱いております大きな親愛の情ゆえに、またキリスト教徒たちの公的な平安と平和を願うがゆえに、こうせずにはいられないのです。私はつねに彼らの平和を擁護してきましたし、今後もそうし続けるつもりです¹⁹⁾。」

ヘンリー8世に宛てたビーベスの書簡の主な目的は、キリスト教国であるフランスとスペインの間に平和を見い出すためであった。一方、同年10月付けの書簡では、キリスト教世界の平和を願うとともに、ヘンリー8世に「君主」の役割について述べている。

「まさに国家における君主は身体における魂の如きであり、自然の姿でもあります。魂が影響を受け錯乱しているとき、どれほど身体も混乱し痛んでいることでしょうか。……闇や孤独ですら彼の行為のどれ一つとしてその拡大を阻むことができません。なぜなら彼の君主としての輝きが彼の人格を光らせ、彼に注がれる多くの眼を裏切ることができないからです²⁰⁾。」

しかしその頃、ビーベスがヘンリー 8 世に寄せる期待とは裏腹に、彼の心を悩ませる問題が持ち上がっていた。1527 年、王はカトリック教会にキャサリン王妃との離婚を正式に願い出た。ビーベスは、宗教上の理由から、また王妃に抱いていた親近感から、王の行動に異論を唱えた。その結果、彼は、1528 年 2 月 25 日から 4 月 1 日にかけて、在ロンドンのスペイン大使イニゴ・メンドサの監視のもとに軟禁状態に置かれた。後にビーベスは親友クラネヴェルトに次のように書いている。

「イギリスで私が捕らえられていたことを聞いたことと思います。その動機は彼らにとって、即ち、それを命じた人たちにとってたいして誇らしいものではなかったのです。私は王妃の主張を全力で支持しました。38 日後、再び宮廷に足を踏み入れないとの条件で——この条件を私は喜んで受け入れました——釈放されました²¹⁾。」

ビーベスの『政治学大全』の中で最も大部の書が『ヨーロッパの騒乱と対トルコ戦争について』であり、そこで彼は、宗教間の争い、君主間の争い、そしてトルコの脅威について、登場人物を通して自らの考えを表明している。ビーベスは、冷徹かつ厳格な地獄の判事ミノスの法廷に霊たちが集まり、君主間の争いが打ち続くヨーロッパの現況について論議するという「対話編」を仕立てた。その他登場人物としては、その正確な予言でユリシーズの信頼も厚かったというギリシャ神話の盲目の予言者ティレシアス。地上の宮廷から来たばかりというバシリオ。戦火相次ぐ状況について精通していたポリブラグモン。その他、ローマの將軍スピキオや幾人かの霊たちなど。作品の冒頭でミノスがバシリオに、近頃なぜこんなにも沢山の霊が下りてくるのかと問う。バシリオが戦争をその一因として挙げると、ミノスはその戦争の張本人は誰かと尋ねる。

「バシリオー人の中で最も賢いといわれる人にとって、それはどういうことですか。誰に戦争をやってほしいというのですか。王たちや国民たちですよ。

ミノス—犬や猫たちじゃないとはびっくりだ。……どの王か、そしてどんな風にしてか。

バシリオーあまり聞かないでください。王たちについて語ることはそれなりに危険が伴うことなのです。皆、良い王さまですよ²²⁾。」

その時代、ヒドラの頭のように各地で次々と戦争が勃発した。鋭い感覚に加えて、商人として広く世界を見知っていたポリブラグモンは、ナポリ戦争のことやトルコによるコンスタンティノーブル占領について、また、キリスト教徒の君主間の争いを尻目に、トルコがギリシア、マケドニア、エウベア、そしてエーゲ海の島々を攻略していった様を語る。次に、フランスのカルロス 8 世やルイ 12 世の時代におけるナポリ継

承戦争、フランス王による一時的なナバラ占領。カスティーリャにおけるコムニダーデスの乱、トルコによるロードス島の占拠など、ヨーロッパでの一連の出来事に触れる。そうした対話の中に、ビーベスが当時のキリスト教世界に対して抱いていた強い危機の念が描き込まれている。

「ポリプラグモンールター派と反ルター派が憎みあうことは私にとって大した驚きではありません。私にとって最も痛ましいことは、互いに激怒かつ逆上しており、相手が相補われるよりも負けて解体するのを見たがっていることです。争いの激しさのあまり、行きつくところは相手の消滅しかありません。また、ルター派の人たちの間ですら愛も和合もなく、彼らの口をついて出ることは、信仰、福音、慈悲という言葉だけです。……キリスト教徒たちが一握りの土地をめぐる争いあう一方で、トルコは彼らから広大な領土を奪う。我が方は大いに策を練り、集えども、すべては徒労に終わる²³⁾。」

「ティレシアス—スペインとフランスにとってそれ以上に好都合なことはなかった。ミノスよ、アルプスの向こう側の人たちがそうした決定に至ることを願わずにはいられない。その二つの王国、即ち、キリスト教世界全体が平安でのどかであり、人にも富にも恵まれて過ごすことができるであろう。その時、キリスト教世界の資力はもっと確実であり、その力と軍事力はトルコに恐れを抱かせるであろう。……キリスト教徒の間の深く相容れない分裂こそが、トルコに十分な安全を保証するのである。トルコに、彼らがヨーロッパと呼ぶ国々を侵略しないという保証を与えたかどうか尋ねてみるがいい²⁴⁾。……

スピキオー—もしヨーロッパの君主たちが、憎しみに我を忘れ不和に猛り狂い、トルコに対して武器を取るとすれば、彼らの思うつぼだろう²⁵⁾。」

ミノスがティレシアスに現世での不和の原因について尋ねると、その原因が内部にあること。そして、キリスト教徒の唯一にして強い武器はキリストの後見であるという考えが述べられる。

「偉大な知の探求者アリストテレスと彼に倣って自然と諸原因の研究に献身した多くの人物たちによれば、最も勇敢で強靱な種族はヨーロッパ人である。アジア人たちは臆病で戦争には適さない。男よりも女に近い。ヨーロッパは勇気と力においてだけでなく残忍さにおいても優れた人間を生み出している。……彼らはあたかも、内部の不和が原因で、また相手の力を過小評価したことで、または不注意にも危険に巻き込まれたことで、優等な民族が劣等な民族に敗れたといったことを一度として耳にしたことがないかのようだ²⁶⁾。」

「ティレシアス—君の求めに応じて、ごく簡単に私の考えを述べよう。キリスト教徒の唯一の武器、唯一にして極めて強力な守りとは、信頼し加護をお頼みするキリストの後

見である。もし彼らがその保護のもとに迎え入れられるなら、無敵で不可侵であり、いかなる国からも被害を受けることはない。もしキリストによって受け入れられないとすれば、哀れな餌食以外の何者でもないだろう。しかし、彼らは望めばいつでも迎え入れられるのであり、主はそのもとに帰ろうとする人にとってはそこにおられる明らかな存在なのです。眼を開けてどれほど偉大で無敵な指導者を得ているかを見るがいい。主に戻り、主に最も熱い視線を注ぐがいい。キリスト教徒という名前だけに満足することなく、実際にそして行いにおいてもその栄光に満ちた呼び名に値するようになるべきである²⁷⁾。」

キリスト教世界の平和の鍵を握るのはカール5世とフランソワ1世であり、ヘンリー8世の協力も得られるものとする。

「その処置の仕方や人間間の協力ということについては、あの二人の若者（カール5世とフランソワ1世）が、それぞれ所有している広大な帝国に満足して、平和と和合に生きるべく合意することができるとすれば、その傷はたいしたこともなく癒されるであろう。少なくともそれぞれの王国を増大させようとして、血によってまたキリスト教徒としての同一の秘跡を信じ与かる隣人を攻撃するのではなく、彼らの宗教とかくも相容れない対立する敵を分別をもって攻撃するとすればである。私としては、第三の若者（ヘンリー8世）が彼らの安定した和合にとって障害であるとは思わない。なぜなら、彼は明らかに少し遅すぎはしたが、幾多の陸や海の向こうまで、善良かつ慈悲の心から使節を送ってハンガリーに救いの手を差し伸べたからである。できることはしたのである²⁸⁾。」

最後に、ティレシアスはヨーロッパにおいてドイツがいかに重要な部分を占めるかを力説する。キリスト教徒には依然としてドイツというヨーロッパの最も肥沃な部分が残っていること。互いに戦火を交えあうことを止め、指導者と城壁でもって、そして何よりも住民が団結することでドイツを強化し、難攻不落とすべきこと。トルコがドイツを占領しないよう、キリスト教世界の団結を訴える。

「もしそうでないなら、全ヨーロッパが彼らの権力下に落ち、彼らの支配下で生きることを望まない人たちが艦隊を組んで新世界 novus orbis に移住しなければならなくなるであろう。……確かにヨーロッパは最強である。しかし、トルコ帝国がヨーロッパの最良の部分所有したとすれば、それが何の役に立つだろうか。トルコが後退するとか、得たものだけで満足するとか、キリスト教徒間の不和によって生み出された絶好の機会を見逃すなどと期待してはならない²⁹⁾。」

そして、キリスト教世界はいっときも早く平和を実現し、共なる救済について互い

に熟考すべきであると結んでいる。

2. 『人類の和合と不和について』

ビーベスの著作の中でも、彼の平和についての思想を最もよく表明しているものとして『人類の和合と不和について』（以下、『和合と不和』と略記）と、この作品のプロローグ的働きをしている『平和論』がある。ここでは、『和合と不和』を中心に取り上げる。ビーベスは、この書の著作動機をビュデに宛てた手紙（ブリュージュ、1529. 9）の中で明らかにしている。

「『和合について』と題した私の本をバルダウラ氏から受け取られることでしょう。それは、現代の出来事に思うところがあって、この夏に著したものです。私は病弱でもあり、多くの悪しき問題に策を講じることはできませんが、せめて感じていることを紙面で述べるなどして、慰められ、少しの安らぎでも得られればと思います³⁰⁾。」

ビーベスにとって、キリスト教世界は、神の子であるすべての人にとっての普遍的祖国であり、問題はその世界が分断され、半壊状態にあったこと。しかもロードス島とベルグラードを陥落させた数年後の1526年には、オスマン＝トルコがハンガリーまでも占領することで、いままさにトルコの危険がヨーロッパの核心に迫っていたことである。200年にわたってトルコは勢力を伸ばし続けてきた。それはとりもなおさずキリスト教世界が分裂していたことに因るものであるとビーベスはいう。アジアがヨーロッパを破ったことはいまだかつてなかったが、もしキリスト教世界がこのまま内部分裂を続ければ、かつてヴェルギリウスが「ここまで不和が悲惨な市民らを引きずって行った」（『エゲロガ』I、VV. 71-72）と述べたようになると懸念した。

『和合と不和』において、ビーベスは皇帝カール5世への献辞の中で、打ち続く戦争によってヨーロッパ全体がいかに荒廃の極みにあるかを述べ、その物質的再建もさることながら、「平和と和合」の達成が何よりも緊急の課題であり、それを可能にできる人物は、意志と権力を備えた諸君主の君主たる皇帝以外にはないと説く。

第1章において、ビーベスはいかにして諸悪が分裂を生み出すかについて手短かに述べた後で、人間には本性的に平和を求める傾向があるとして、その理由を列挙する。即ち、人間には「社会性」があること。人以外の動物は自分の産みの親を憶えていることもなく、優れた人を認めるわけでもない。祖国愛や慈悲の心もない。しかし、人間は両親を始め、自分を何らかの意味で助けてくれた人のことを憶えている。これはとりもなおさず人間が「共通の本性」を持っていることによる。また、人間には「言葉」があること。人は言葉によってその思うところを他の人に伝えたり、過去や未来の出来事についても話すことができる。ビーベスは、言葉にあるこの伝達の機能を「漏

斗」に喩えている。また、言葉とともに人には「表情」があり、一種の言葉の役割を果たしており、人が社会生活を営むに際に力となっている。神は、どのように社会を築いていくべきかを知らしめるために、人間には他の動物にあるような鋭い爪や牙などを与えることはなかった。外部からの害に対して、人は互いに守りあうことが必要であり、「他者の存在の必要性」が認識される。

第2章でビーベスは、和合と不和の起源と本性について述べた後で、どのようにして不和によって我々の意志が正しい道から逸れて行くのかを明らかにしようとする。和合と不和を生み出すものは何か。和合がすべての善の作り主である神に起源するとすれば、不和は何に始まるのか。

歴史を検証してみると、不和を引き起こす原因の一つが人間にある「情念」pasionesであり、その主たるものは嫉妬心、怒り、傲慢、野心である。例えば、傲慢に関して、ビーベスは次のように論を説く。情念を抑えることは容易なことではなく、ソクラテスが天から呼び寄せたといわれる哲学の分野においてすら幾多の不和が生じている。

「我々はプラトン、アリストテレス、ヒポクラテス、キケロ、セネカ、クインティリアヌス、プリニウス、聖ヒエロニムス、聖アウグスティヌス、その他著名な作家たちを文学や芸術における我々の祖として崇拝している。しかし、彼らにも我々が受け入れる点と明らかに拒否してしまう点とがあるのではないか。それにも拘わらず、我々は彼らに少なからざる権威と、彼らの言葉に信頼をよせるのである。彼らは偉大な人物であったが、しょせん人間であり、多くのことを知ってはいたが、また知らなかったことも多々あったのである。彼らも騙しもしたし、騙されもしたのである。しかし、我々とはというと、単なる人として扱われることを好まないものである。他人の誤りに対しては、人間だからと人文主義者さながらの根拠を持ち出したりするのであるが、自分はというと、悪魔のような傲慢さでもってそうした言い分けを拒絶するのである。しかし、人間として扱われることを望まない人は、まさに人間ではなく獣なのである³¹⁾。」

こうしたビーベスの人間の心の動きをめぐる観察は、戦争を続ける王や諸侯たちの政治行動ばかりでなく、いさかい、嫌悪、仲たがひ、策略に満ちた人々の日常生活にも向けられた。また、聖職者層にもその鋭い眼が向けられた。多分にプロテスタントによるキリスト教世界の分断に言及して、次のように述べている。

「博識な者の中に、自分たちの党派の人たちの欠点に気づき、彼らのことを嘆く者がいるように、宗教人の中にも同胞の欠点を見て、それを調べ、けなし、できるかぎり彼らを避けようとする者がいる。……その影響からして、ずっと忌まわしいものは、大衆をだめにする司祭による悪い手本である³²⁾。」

第3章と第4章には全体の約三分の二の紙数が割かれ、主たるテーマである平和の獲得に向けての考察が展開される。ビーベスは、平和の獲得のための「外的な道」、「内的な道」、「超越的な道」という三つの可能性を指摘する。

「外的な道」は、人間の意識の外部で作用する諸手段をいう。人の意識が、和合と平和を、また逆に不和をも作り出す。意識はその周囲から平和の道を進むことを示唆する様々な刺激を感じ取る。その一つが、裁判所と判事による仲介または裁定である。裁判所は不和という病気が共同体の構成員たちの間に広がらないための社会的薬である。しかし、それはあくまでも拡大防止策であり、裁判所の判決によって「憎しみ」が鎮まることはない。

またビーベスは、「君主」princepsと「賢者」sapiensの役割を称揚し、両者の間には人間としての質的な違いを見ないとする。

「君主と賢者の間には、他の人々に命令するということでは何らかの違いがあるかもしれないが、正しい判断、精神、助言、意志ということに関しては何の違いもない³³⁾。」

君主も賢者もどちらも和合と平和のために仕えるべきである。賢者とは自分の情念を完全に支配することができる人のことである。ビーベスは、賢者とは波間で溺れている哀れな人たちに手を差し伸べ、彼らが岸にまでたどり着けるように導く人、即ち、人々のための救命道具的役割を担う人のことであるという。君主も同様の役割を果たす。

「(君主とは)彼の国民の精神であり、意志であり、感受性であり、また生ける理性である。……共同体における相互愛の調停者であり、平和の絆であり、平穏さや暇の絆でもある。彼が、篤信家、情け深い人、慈善家、祖国の救済者、とりわけ祖国の父と呼ばれる所以である³⁴⁾。」

ビーベスにおける第二の道である「内的な道」は、彼の道徳思想を示すものとして重要である。生とは永遠性へと向かうための巡礼または流浪であり、この道にとって唯一の旅の「手段」viaticumは「徳」virtusである。それ以外のすべては徳の支えまたは道具である。(ここで、「文芸」bonae litteraeが称揚された人文主義の時代にあって、ビーベスが「徳」の第一義性を説いたことは注目に値する。)人生が永遠性を求める巡礼の旅であるとすれば、本来的には、平和を乱す人間の現世的野望のすべてが意味を持たないことになる。こうした考えが、際限のない情念やこの世での財を求める様々な欲望にとって最大の抑止力となる。徳の中でもビーベスが最も重要なものとしたのが、人間の社会集団において絆の役割を果たす「正義」justitiaであり、正義が行

われるに際して必要となる「法」は都市における魂のごときものとした。正義を建築の礎とすると、建物にあたるところが平等、隣人愛、慈悲心という徳である。どちらの部分も欠けても建築は成り立たない。動物は本能によって行動するが、人間は隣人への愛をその行動の源とする。

「真にして神聖なキリスト教は、愛、慈悲心、平和そして和合について、あなたに見える隣人への愛とあなたに見えない神への愛との二章に要約されうるのではないか。……少し前のところで聖パウロは人の愛についてこのように述べている。《姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな》、その他はどんな掟があっても、《隣人を自分のように愛しなさい》という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。愛は律法を全うするものです³⁵⁾ —— ロマ書、13、9-10——。」

ピーベスは、『和合と不和』の第四書の最終章「慈悲心の称揚」を次のように始めている。

「私がこれまでに述べたことは、ほとんどすべてがこの地上での生についてであった。しかし、もし誰かが永遠の報いを想い、望んで上昇したとしたら、また恐ろしい拷問を思い浮かべたとしたら、何と言うべきであろうか³⁶⁾。」

すべての天上的な財は永遠であることから、靈魂が、人間の精神が理解できるすべてのものよりもより優れ、より幸福な神自身と一つになることにより、すべての希望、すべての切望、すべての人間的想いを超越する。その反対に、神との分離は苦しみまたは拷問となる。

聖なる平安をもたらすため、地上にキリストが遣わされた。この平安はあまりに偉大であり、傲慢さで腫れ上がった人知によっても人間たちの富や財や権力によっても付与されえない。それは言葉では説明不可能であり、唯一それを体験した者だけが信じるに至るのである。

「平安こそ、壊れ弱体化した理性が人に与えることができないものを人に与えることができる。我々の内なる平安が精神の安寧によって獲得され強められると、外的な反目はありえなくなる。外的な反目は永遠の源泉である内的な反目から生じる³⁷⁾。……しばし情念を捨て去り、理性に、精神に、良識に助言を仰ぐべきである。……平安と和合は永遠の幸せへと続く道であり、内的な争いと悪意は永遠の悩みと苦しみに向かうものである。……汝自身に帰り、本当の自分を愛しなさい。あなたが卑劣でなく、自分自身から逃げなければ、容易に自然と一致し、神にまでのぼることでしょう。あなたが嫌悪するものは憎しみと不和のほか何もないでしょう。同様に、和合と愛のほか何も気にすることはないでしょう³⁸⁾。」

ビーベスにおける第三の道は「超越的な道」である。キリストは神秘体であり、その社会的可視的表現が教会であり、教会の歴史的表現がキリスト教世界である。キリスト教世界は慈悲の徳によって命を与えられている。万人が神の子であり、キリスト教的な慈愛には終わりがなく、それは、「同様にトルコ人も愛されるべきである *Amandi sunt Turcae*³⁹⁾」に表現されるように、敵にまで及ぶものであること。ビーベスは、迫りくるトルコの脅威を前に、キリスト教徒としてキリスト教世界を防衛する必要性を説く一方、キリスト教徒として慈悲の心の偉大さを説くことも忘れなかった。

IV. 前章ではビーベスの平和論に関連した著作姿勢とそこで取り上げられた問題を読みとることによって、彼の平和思想を支える主要な要素を浮き彫りにすることを試みた。掘り起こされたテーマを3点に整理すると次のようになる。

1. 知者には現実の社会に関わる責務があること。
2. キリスト教的世界観と絶対的平和論について。
3. 人間は本性的に平和を求める存在であり、不和は情念に起因すること。

1. 知者の社会的責務

ビーベスは『学問論』の中で、哲学者の責務について次のように述べている。

「公共の福祉はすべての学問の終止符、即ち、対象であり目的である。人生に有益な学術が探され、見つけ出されたら、公共の福祉のために用立てられるべきである。こうすることで、学術にとっての永遠の報いが得られる。知識とは、富を増したり、現世的な利益を得たり、はかなく移ろいやすい快樂に耽けるためのものではない⁴⁰⁾。」

ビーベス思想の社会的次元の根本とは、人間が生来社会的存在であり、隣人に対して慈悲深い存在であること。また、知者の第一の責務は、自分が生きることになった歴史的現実を自分の生と無関係なことを考えるべきではなく、その生涯を自らの責務の遂行に捧げるべきであること。知そのものが公共の福祉のために役立てられるべきであり、知者はその目的が達成されるよう、分別のある博識をもって影響を及ぼすことができるような場所に身を置くべきであること。

「知者と君主は互いに関わり合うことなく独立して生きる別種の人間ではない。互いに支えあい、助けあう存在である。博識は平静さを必要とし、それを君主の権力が提供する。君主は多くの偉大な仕事を遂行するために必要な助言を知者に求め、知者は学問の中で培った思慮深さをもって君主に助言する⁴¹⁾。」

こうしたビーベスの社会問題についての関心は、主としてエラスムスやトマス・モアたちとの交友の中で育まれた。彼はその信念に基づいて、ローマ教皇ハドリアヌス6世や英国王ヘンリー8世を始め、各君主の顧問官たちにも直接働きかけた。彼が理想としたことは、一人の君主のもとでヨーロッパが堅固なキリスト教世界としての統一を達成することであった。多分にフランスやスペインの野望が引き起こしたイタリア問題や、カトリックとプロテスタントの間の論争が解決を見て、ローマ教皇の道徳的権力がキリスト教世界全体 *Sacrum Imperium* に及ぶこと。カール5世とフランソワ1世の間に和が成立すること。また、すでに東ヨーロッパの一部を征服していたトルコの脅威に対してキリスト教世界が力を結集することであった。

ところで、ビーベスにおいてはこうした実践力を持った知者の「知」とギリシャ・ローマの「古典」とはどのように関連づけられていたのであろうか。彼において、いかにして古典の知恵とキリスト教信仰が結びつき新しさを獲得したか、小林博英先生(1929-1982)はその見解を以下のように述べている。「実に、もし思想の名に値するものが、人間が人間として意味ある生を生きて行く為の種々な具体的技術や生活様式とこれを支配する論理の体系というべきものを、いわば不可欠の枠組みとしてもっているといい得るならば、全く同時に、否それに先立ちさえして、それらの技術や様式や論理を行使する行為が最終的に志向しかつ意味づけを得る諸々の価値に根底を与える信念の体系といわれるものを不可欠の根拠としてもつというべきなのである。ところで、ビーベスの新しさは第一義的にはこの論理の体系に関するものであったが、しかもそれはいうなれば信念の体系という古い幹に異質のものとして結びつけられたのではなく、ほかならぬこの古い幹の樹液が、時至ってルネサンス的楽天の希望を帯びて芽をふいたというべきものにほかならない。古き幹とは、古典古代の知恵と中世キリスト教の信仰の遺産にほかならない。ここでキリスト教的遺産としての信念の体系といったものの骨子は、ほぼ次のように表現してよいであろう。すなわち、全実在の自然の背景に第一原因にして最終の目的としての神を見、存在そのものを神の愛による贈与ととらえ、原罪に傷ついていることを承認しなら、神のほうから無償の愛により、この自然性＝人間性はずいに神的本性にまで参与すべく召されていること、つまり、人間性の驚くべき悲惨と比類なく高貴な招命との極度の緊張参与すべく召されていること、つまり、人間性の驚くべき悲惨と比類なく高貴な招命の認識（後にパスカルが『パンセ』の中で鮮烈に際立たせるものだが）をもち、最期に、諸学の認識は（古典に示唆されている）知恵に導かれ、ついには（キリスト教的）英知に進むのでなければ児戯にさえ等しいことを確信していることである。そして古典の知恵とは、哲学的にはソクラテス、プラトン、アリストテレス以来の知的誠実の成果だけでなく、より広く人間的には、ローマ的な実践の優位のエートスの中で醸成された、キケロ、ヴェルギリウス、クインティリアヌスらを通して形成・継承されてきたフマニタースの

中に結晶しているものを指していたといってもよいが、それがキリスト教的な愛の実践の優位の強調の中で、新たに活性化されていったものにほかならない。それゆえ、そこでは既に古代が新しさを帯びていたのである。しかも、知的展望からいっても、ビベスは神の創造になる自然の絶えざる新しさというべきものを、その創造についての信仰によって確信していたとすることができる。だからこそ、自己の感覚と理性とを用いて、絶えずこの自然に接近しようとする探究のリアリズムが成立するのである。ビベスの知的な新しさの秘密がここにあるのであれば、古き幹に新しい芽がふいたといった先の比喻は単なるレトリック以上のものとなろう⁴²⁾。」

ここから明らかなように、ビーベスは人文主義とキリスト教の間に微少な対立さえも見ておらず、両者間には完全な補完性があると考えていた。それは、古代ローマの神学者テルトゥリアヌスが「すべての良い魂は本性的にキリスト教的である」とした考えに多少とも連なるものがあった。

2. キリスト教的世界観と絶対的平和論

ビーベスにとってキリスト教世界の分裂とは、主として君主間の政治的争いならびに教会の教義論争に関するものであった。第一の点に関しては、『和合と不和』が書かれた1526年から1529年にかけて、パヴィアの戦い(1525)でフランソワ1世がカール5世に敗北し捕虜となったこと。また、ローマで教皇クレメンス7世がカール5世によって幽閉されたことなど、動乱の時代と呼ばれるにふさわしい出来事が連続した。ビーベスが殊のほか心を痛めたのは、その政治的争いがほかでもない彼を生み育んだスペインとフランス間の出来事にあった。彼は、自分の使命はスペインを誉めることでもフランスを誉めることでもない。全著作中において、両国の戦争の激しさを忌み嫌らい、もしできることであれば、戦争を人間の心から根絶、または少なくとも弱めるか減少させたいと述べている。

「どうか私が、キリスト教徒にふさわしい極めて高貴な業に身を投じた私が、自分を生んでくれたスペインと自分を育ててくれたフランスが、繁栄と活力に包まれて、一緒になって一つのこの上なく素晴らしい(どちらがより文化的であり、より思慮深く、より人間的かを競う)競技に向かって歩む姿を見ることができますように。キリストのお力添えがありますように⁴³⁾。」

彼は、和を達成するためには、「二人の若者」たるフランソワとカールにそれぞれ率いられたフランスとスペインの間に協定が結ばれるべきであるとした。この考えは、1520年代のビーベスの著作全般において見られることである。

スペインとフランスの君主間の争いとともに、ビーベスにとって、教義上の争いは

解決不可能に近いほど深刻であった。政治上の争いは力で解決を図ることもできるが、教義上のそれは力では何の解決も得られない。この点について、フォンタン教授はビーベスの悲観的姿勢を指摘している。「ビーベスは、トルコの問題に触れるとき、キリスト教諸国内部での分裂を引き合いに出すことはなかった。その理由として、カトリック勢力とプロテスタント勢力の間の分裂はすでに調整不可能な状態にあり、それは皇帝と、プロテスタントを支持するドイツ諸侯の間の妥協以外には解決は不可能であると見ていたことに拠る⁴⁴⁾。」

すでに見たようにビーベスは、『和合と不和』において、カトリック教国間およびその統治者間の争い、ルター派による宗教分裂、オスマン＝トルコからの絶えざる脅威、ヘンリー 8 世の分別を欠いた傲慢さなど悲しむべき事態について多々言及した。その書のスペイン語訳者リベラ教授は、この作品の正確な理解のためには、カール 5 世の政策の意味についてメネンデス・ピダルが開陳した見解は説得力のあるものであるという⁴⁵⁾。それによれば、カール 5 世の視野には、大教皇レオ 1 世（在位 440-461）の説得に応じてアッティラがイタリア攻撃をあきらめたとき以来、「世界帝国 imperium mundi」か「キリストの平和 pax christiana」か、即ち、「力による世界君主制」か「キリスト教による世界の統一」という二つの考えがあった。近代になると、マキャヴェリ（1469-1527）による第三の政治観が出現した。彼は、君主は政治の現実を冷静に見つめ、政治をキリスト教の倫理観から解放すべきこと。そして国家そのものに倫理的価値を与えるべきであるとした。ピダルによれば、カール 5 世はスペインからの影響もあり、1520 年には、旧来からのキリスト教世界の理念である信仰と平和における統一の道を選択するにおよんだ。1536 年には、カール 5 世はローマにおいて教皇や司教たちを前にして、キリスト教世界の平和を守る旨、スペイン語で語りかけたという。リベラ教授は、こうした時代状況がビーベスの『和合と不和』と題した作品を生み出したと指摘する。「我々の見解では、ビーベスはあらゆる戦争を拒否することにより、すべてのキリスト教徒を、そして教皇をも非難した。フランソワ 1 世とカール 5 世の争いや『ローマの略奪』についてにがにがしく語るとき、彼は誰一人として許すことがない。皆が兵士たちの悪しき狼藉に加わり、いたる所に荒廃と死をもたらしたという。『平和論』には、極めて意味深い下りがある。そこでビーベスは、カトリック王（カール 5 世）と、この上なくキリスト教徒の王（フランソワ 1 世）と、そして、信仰の守り主である王（ヘンリー 8 世）と対峙し、彼らに等分な責任分担を求めているのである⁴⁶⁾。」

『和合と不和』が、ビーベスが「その手と意志に人類の和合と平和の大部分がかかっている Tibi haec visum est dicare, in cujus manu et voluntate maxima est sita pars concordiae ac quietis hominum⁴⁷⁾」として、カール 5 世に献呈されていることから、1526 年から 1529 年にかけて、少なくとも『和合と不和』を書いていく段階では、

「ローマの略奪」にもかかわらず、ビーベスはカール5世がキリスト教世界に平和をもたらす主たる人物であると考えていたと思われる。

しかし現実問題として、16世紀前半には、ビーベスが擁護した「キリスト教世界」*respublica christiana* は、「諸国家」*nationes* と地球規模での「全体世界」*totus orbis* という観念の台頭を前に地歩を失いつつあった。中世において支配的であったキリスト教世界という観念は、ルネッサンスの時代になると宗教的危機と文化的危機という二重の危機に見舞われた。それに、プロテスタントの分離とマキャヴェリの『君主論』やチェザレ・ボルジア(1475-1507)による反キリスト教的姿勢の出現などが加わった。近代国家の誕生は中世以来の、全キリスト教徒が教皇と皇帝をそれぞれ聖と俗の最高支配者として仰ぎ、そのもとに統一的な世界国家 *civitas una* を構成するという考えに大きな衝撃を与えつつあった。また、ヨーロッパの中で国家間の争いが続く折、スペインの事業により「世界」という新しい歴史範疇が出現しつつあった。サラマンカの国際法学派の創始者フランシスコ・デ・ビトリア(1483-1546)においては、「世界」は、キリスト教徒だけではなくアメリカ・インディアンなどの異教徒をも含めた普遍的人類社会を意味した。エラスムス、ビーベス、そしてビトリアは、キリスト教的世界の重要性と存続についてはおおそ見解が一致していた一方、「世界」という範疇に関しては、エラスムスとビーベスはアメリカの問題にはそれほど踏み込んでいないのに反して、サラマンカ学派は大きな展開を見せ始めていた。

「正当戦争」*bellum iustum* について、ビーベスはキリスト教国家間の戦争は理由の如何を問わず排除すべきであり、キリスト教世界の敵に対してのみそれは義とされるとした。彼はキリスト教徒としての立場から、ビトリアが特別講義『戦争の法について』*De jure belli* を講ずる20年前、絶対平和主義を唱えた。一方、ビトリアと彼の後継者たちは、戦争時においてすら正義と法は尊重されるべきであるとして、「戦争の法」を肯定した。ルターの考えに反して、対トルコ戦争の正当性、つまり防衛戦争の義務を説いた。トマスの戦争論を基本としたビトリアの書は中世のスコラの理論の伝統に沿ったものであるが、「それにもかかわらず、ビトリアの戦争法論は、近世のかれの時代を反映して、新しい発展をとげた。それは、かれが戦争を、1. 当時の神学を支配した良心問題の決疑論の立場から論じたことと、2. その時代の普遍主義の思想にもとづいて、異教徒とキリスト教徒とを区別することなく、すべての人間が普遍的人類社会を構成し、そのなかにあってかれらは戦争に関しても共通の法の支配をうけることを説いたことと、3. このことと関連して、その当時の時代風潮であるユマニスムの立場から、人間の基本的な権利の尊重を強調したことのためである⁴⁸⁾。」ビーベスやエラスムスがキリスト教の立場から理論展開したのに反して、ビトリアは倫理的法学的観点から考えた。一方マキャヴェリは、戦争を避け難い政治的要求であるとして、戦いに勝つことを教え、必要とあれば正義と法すら排除した。

かつてオルテガが、「ビーベス自身が一つの新しい地平線であり、中世的生《キリスト教的・ゴシック的世界》と近代的生《自然主義的・バロック的世界》のちょうど分水嶺の上に現れている⁴⁹⁾」とした見解は的確である。

3. 内面主義と情念論

ビーベスが現実の世界について思考を巡らせるとき、人間がその関心の核心を占めていた。人間の内面に注がれた彼の鋭い観察眼について、フォンタン教授は次のように指摘する。「このような重大な政治的宗教的問題にさらに多くの出来事が重なった。この事実は不和の起源と和合の源泉が、実は人間の精神の内部に宿るものであることを示している。ビーベスは、学者たちが一つの言葉、または文法についての一問題のような些細なことについて議論を繰り返しているという。また、神学者たちは、とどのつまり、異なった信仰を持つルター派と反ルター派の間の議論ではなく、スコトゥス派とトマス派の間で、またはこの両者のいずれかとオッカム派との間で議論を繰り返しているといっている。それはあたかもビーベスが青春時代に目にした、パリ大学におけるえせ弁証家たちによる論争そのものであった⁵⁰⁾。」

ビーベスについての大著『ルイス・ビーベスとルネッサンスの哲学』において、ボニリャ・イ・サンマルティンはメネンデス・ペラーヨに倣いランジェ師の言葉を引用している。「ビーベスは彼の時代のもっとも優れた知性の一人である。彼の心理学、特に情念 *pasiones* に関する点では、鋭い観察と独創的な見解に富んでいる⁵¹⁾。」

本稿の第Ⅲ章において、ビーベスが直接または間接に「不和」の源泉について述べている個所を指摘した。『ヨーロッパの騒乱と対トルコ戦争について』においては、不和は「内部に」起源するものであること。ヨーロッパ内部の君主間の争いは、君主たちの内なる欲望に起因すること。『和合と不和』においては、不和の原因が人間における「情念」の乱れにあることが説かれていた。ビーベスは、情念論を晩年の作『靈魂生命論』⁵²⁾ (1538) においてさらに発展させた。

人間の情念について誰よりも優れた考察を著した人は、ビーベスに先立つ時代では聖アウグスティヌスであった。聖アウグスティヌスは『告白録』において、またビーベスはその『靈魂生命論』において、情念について考察している。両者の情念論を比較してみると、アウグスティヌスにおいてはそれは自己の感情の吐露であり、学問体系の構成に無関心であるが、ビーベスは『靈魂生命論』の第三章で人間の心理の客観的な分析を行っているという際だった違いが見られる。

ビーベスの靈魂論の出発点は、人が神によって創られ、善を求めるために理性が与えられたこと。人の精神は原罪により闇に包まれ、理性は肉体の牢獄に繋がれていること。それにもかかわらず、我々には神による善の残り^{なご}が存在しており(「保存」*conservatio*)、人は本性的に善や真理へと向かう。動物には闇がなく、刺激本能により善か悪

かに向かうのに対して、人は真と偽を判断する。真偽の判断は、人の理性に思弁的な面と実践的な面とを付与する。つまり、真理の探求と善の遂行である。思弁的理性は「精神の鋭さ」によって発展し、実践的理性は「経験」と「教育」によって成長する。

理性が正しく行使されるには、情念の動きを熟知し、管理することができなければならない。靈魂の上部にあたる理性は、肉体と結合していることから動物的で残忍な情念に強く支配されている。つまり、靈魂の下部は、傲慢、妬み、悪意、怒り、恐れ、悲しみ、強欲、うぬぼれなどに表れるように、人間よりも動物に接近している。情念の研究は、公私を含む道德の学問の基盤である。ビーベスは経験的な観察に基づいて、情念に、愛、喜び、笑い、願望、希望など善に向かうもの、嫌悪、憎しみ、悲しみ、恐れなど悪から遠ざかるもの、そして怒り、妬み、激怒など悪に対するものを区別した。彼の研究の主眼は、こうした情念にはどのような相互関係があるのか、どのように扱い、どうしたら理性の導きに従えることができるか、という点にあった。戦争と不和はその源泉が混乱した情念にあり、平和と和合はその源泉が理性と精神にあると考えたからである⁵³⁾。

V. 結論に代えて

1. ビーベスは決して長くはない生涯に多数の「平和論」を著した。これはとりもなおさず、彼が生きた時代のヨーロッパが近代国家の台頭や宗教改革の出現に代表される動乱の時代にあったこと。そして、若き日のエラスムスとの出会い、その後のモアとの出会いを通して学んだ北方人文主義の姿勢が、文芸そのものへの傾倒よりも「知恵袋としての古典」を主張する社会哲学に組していたこと。また何よりも、彼が教皇や王を始めとするその時代をリードする人物に直接助言する地位にあったということに依拠する。
2. ビーベスの平和思想は古典に根差した人文主義的な傾向を帯びたものであり、それは『人類の和合と不和について』において頂点に達した。彼の絶対平和主義は「トルコすら愛せよ」という言葉に集約される。また彼は、平和と静かさと和合は文化の創造と繁栄にとって絶対条件と考え、その実現に向って知識人としての役割を果たした。
3. ビーベスの平和論は大筋としてヨーロッパのキリスト教世界をその視野に入れたものであった。そこには、ビトリアに代表されるサラマンカ学派が達成しつつあった地球的視野とは開きが認められる。
4. ビーベスは、不和の起源と和合の源泉が、人間の精神の内部に宿るものであるとし、『靈魂生命論』において、経験論的な観察に基づき情念についての高度な分析を行った。その焦点は靈魂とは何かという形而上学的な点ではなく、靈魂の機能と

働きはどういうものか、またそれが理性の導きの下に正しく働くためにはどうすべきかという実践的な点にあった。こうした彼の姿勢はデカルトに先んずるものであり、現代心理学の祖と呼ばれる所以である。

注

- 1) VIVES, Juan Luis: *De concordia et discordia*, en *OPERA OMNIA*, vol. V, p. 307.
- 2) Cf. RIBER, Lorenzo: “Ensayo Biobibliográfico”, en Luis Vives: *Obras completas*, vol. I, Madrid, Aguilar, 1992 (1947-1948); アンヘル・ゴメス＝オルティグエラ『ルイス・ビーベス——哲学者の責務——』——バレンシア州政府文化省研究叢書——木下 登訳 全国書籍出版 1994 年；安藤真次郎「ヨーロッパにおけるビーベス像の変遷——文献学的見地から——」『REHK』第 4 号 (1996) pp. 55-57. 尚、本稿を執筆するにあたり、サラマンカ・カトリック大学エンリケ・リベラ教授ならびにバリアドリード大学安藤真次郎講師から貴重な御助言を得た。ここに記して心からの感謝を表したい。
- 3) Cf. PINTA LLORENTE, Miguel y PALACIOS, José M.: *Procesos inquisitoriales contra la familia judía de Luis Vives*, Madrid, C. S. I. C., 1964.
- 4) ORTEGA Y GASSET, José: “Juan Vives y su mundo”, *Obras Completas*, vol. IX, Madrid, Alianza, 1983, pp. 507-543, en esp. p., 543.
- 5) *Ioannis Lodovici Vivis Valentini Opera omnia*, Valencia, Generalitat Valenciana, 1992-.
- 6) *Joannis Ludovici Vivis Valentini OPERA OMNIA* distributa et ordinata in argumentorum classes praecipuas a Gregorio Majansio. Tomus I-VIII. Valentiae Edetanorum, in officina Benedicti Monforto, (1782-1790).
- 7) *In pseudodialecticos*, Ed. crit. y trad. ingl. por C. Fantazzi, Leiden, E. J. Brill, 1979. Cf. 上掲のゴメス＝オルティグエラ『ルイス・ビーベス——哲学者の責務——』, pp. 221-222.
- 8) NOREÑA, Carlos, G.: *A Vives Bibliography*, Lewiston, The Edwin Mellen Press, 1990.
- 9) RIVERA, Enrique: “Prólogo” para la traducción española de *De la condordia y de la discordia. De la pacificación*, Madrid, Paulinas, 1978, p. 8.
- 10) 佐々木 孝 教授は、ビーベスの著作目録作成にあたって全体を、9つのジャンル（哲学、心理学、教育、神学、文学論、道徳、法律論、社会論、平和論）に分類している。平和論には、7作品が挙げられている。Cf. 佐々木 孝「内側からビーベスを求めて(-)」『東京純心女子短期大学紀要』第 4 号 (1991) pp. 19-21.
- 11) 原本はサラマンカ大学図書館所蔵。
- 12) Cf. 若松 隆 他『概説スペイン史』有斐閣、1987 年。pp. 41-42.
- 13) 安藤真次郎「ヨーロッパにおけるビーベス像の変遷——文献学的見地から——」『REHK』第 4 号 (1996) pp. 55-68. 第 1 期：ビーベスの作品と思想の普及期 (16 世紀)、第 2 期：忘却の二世紀 (17・18 世紀)、第 3 期：再評価の時代 (1782 年から 1963 年まで)、第 4 期：今日のビーベス研究 (1964 年以降)。GONZÁLEZ Y GONZÁLEZ, Enrique: *Joan Lluís Vives, De la escolástica al humanismo*, Valencia, Generalitat Valenciana, 1987, p. 44.
- 14) VIVES, Juan Luis: *Europae statu ac tumultibus*, en *OPERA OMNIA*, vol. V, p. 165.
- 15) *Ibid.*, p. 169.

- 16) *Ibid.*, p. 170.
- 17) *Ibid.*, pp. 171-174.
- 18) Cf. RIVERA, Enrique: "Op. cit.," p. 10.
- 19) *Juan Luis Vives, Epistolario*, Ed. por José Jiménez Delgado, Madrid, Editora Nacional, 1978, pp. 398-400.
- 20) *Ibid.*, pp. 415-416.
- 21) *Ibid.*, p. 498.
- 22) VIVES, Juan Luis; *De Europae dissidiis et bello turcico*, en *OPERA OMNIA*, vol. VI, p. 453.
- 23) *Ibid.*, pp. 455-457.
- 24) *Ibid.*, pp. 464-467.
- 25) *Ibid.*, p. 473.
- 26) *Ibid.*, p. 478.
- 27) *Ibid.*, p. 480.
- 28) *Ibid.*, p. 480.
- 29) *Ibid.*, p. 481.
- 30) *Juan Luis Vives, Epistolario*, Ed. por José Jiménez Delgado, p. 537.
- 31) VIVES, Juan Luis, *De Concordia et discordia*, en *OPERA OMNIA*, vol. V, p. 246.
- 32) *Ibid.*, p. 251.
- 33) *Ibid.*, p. 373.
- 34) 君主をめぐってのビーベスの姿勢に、反マキアヴェリ的な傾向を指摘できる。それは、『君主論』（著作は1513年であったが、刊行は1532年）において展開された政治思想とは大きな隔たりがある。
- 35) VIVES, Juan Luis: *De concordia et discordia*, en *OPERA OMNIA*, vol. V, p. 311.
- 36) *Ibid.*, p. 399.
- 37) *Ibid.*, p. 402.
- 38) *Ibid.*, p. 403.
- 39) *Ibid.*, p. 390.
- 40) VIVES, Juan Luis: *De tradendis disciplinis*, en *OPERA OMNIA*, vol. VI, p. 423; Cf. GUY, Alain: *Vivès ou l'Humanisme engagé*, Paris, Seghers, 1972.
- 41) VIVES, Juan Luis: *De causis corruptarum, artium*, en *OPERA OMNIA*, vol. VI, p. 4.
- 42) 小林博英「ビーベス——近代教育思想の先駆者——」『現代に生きる教育』叢書第7巻 ぎょうせい、1982年。pp. 74-76。
- 43) VIVES, Juan Luis: *De concordia et discordia*, en *OPERA OMNIA*, vol. V, p. 283.
- 44) FONTÁN, A.: "La política europea en la perspectiva de Vives," p. 46.
- 45) MENÉNDEZ PIDAL, Ramón: *Historia de España*, Madrid, Espasa-Calpe, 1966. Introducción: Un imperio de paz cristiana, vol. XVIII, pp. IX-LXXII.
- 46) RIVERA, Enrique: "Op. cit.," p. 19.
- 47) VIVES, Juan Luis: *De Concordia et discordia*, en *OPERA OMNIA*, vol. V, p. 192.
- 48) 伊藤不二男『ビトリアの国際法理論』有斐閣1965年。pp. 176-177。
- 49) ORTEGA Y GASSET, José: "Vives", *Obras Completas*, vol. V, Madrid, Alianza 1983, pp.

493-507, en esp. p. 496.

50) FONTÁN, A.: "op. cit"., p. 46.

51) BONILLA Y SAN MARTÍN, Adolfo: *Luis Vives y la Filosofía del Renacimiento*, Madrid, 1929, pp. 248-263.

52) VIVES, Juan Luis, *De anima et vita*, en *OPERA OMNIA*, vol. VI.

53) VIVES, Juan Luis, *De concordia et discordia*, en *OPERA OMNIA*, vol. VI, p. 421.

参考文献

ビーベスの著作

Ioannis Ludovici Vivis Valentini OPERA OMNIA distributa et ordinata in argumentorum classes praecipuas a Gregorio Majansio. Tomus I-VIII. Valentiae Edetanorum, in officina Benedicti Monforto, (1782-1790).

Ioannis Lodovici Vivis Valentini Opera omnia, Valencia, Generalitat Valenciana, 1992-.

Obras completas. Primera traslación castellana íntegra y directa, comentarios, notas y un ensayo Bio-bibliográfico. . . por Lorenzo Riber, Madrid, Aguilar, 1947-1948 (2 tomos).

Juan Luis Vives, Epistolario, Edición preparada por José Jiménez Delgado, Madrid, Editora Nacional, 1978.

De anima et vita 《*El alma y la vida*》, Intr., trad. y notas por Ismael Roca Meliá, Valencia, Ayuntamiento de Valencia, 1992.

De la concordia y de la discordia. De la pacificación. Ed. y trad. castellana por Enrique Ribera, Madrid, Paulinas, 1978.

『ルネッサンスの教育論』小林博英 訳（ビーベス『学問論』の第二部「学問伝授論ないしはキリスト教的教授論」）明治図書 1964 年。

ビーベスについての研究

ABELLÁN, José Luis: *Historia del pensamiento español*, Madrid, Espasa, 1996, pp. 74-79.

BATAILLON, Marcel: *Erasmus y España. Estudios sobre la historia espiritual del siglo XVI*, México, Fondo de Cultura Económica, 1950.

BONILLA Y SAN MARTÍN, Adolfo: *Luis Vives y la Filosofía del Renacimiento*, Madrid, 1929.

CRUSELLES GÓMEZ, José María y otros: *Joan Lluís Vives, un valenciano universal*, Valencia, Ajuntament de València, 1993.

FONTÁN, Antonio: "La política europea en la perspectiva de Vives", en *Erasmus in Hispania Vives in Belgio*, Acta Colloqui Brugensis 23-26 IX 1985, Lovaina, 1986, pp. 27-72.

GÓMEZ-HORTIGÜELA, Ángel: *Luis Vives, valenciano, o el compromiso del filósofo*, Valencia, Generalitat Valenciana, 1991.

GONZÁLEZ Y GONZÁLEZ, Enrique: "La lectura de Vives, del siglo XIX a nuestros días", en J. L. Vives: *Opera omnia Ioannis Lodovici Vivis*, vol. I, Valencia, 1992, pp. 1-76.

———: *Joan Lluís Vives, De la escolástica al humanismo*, Valencia, Generalitat Valenciana, 1987, en esp, pp. 189-208.

GUY, Alain: *Vivès ou l'Humanisme engagé*, Paris, Seghers, 1972.

- NOREÑA, Carlos, G.: *Juan Luis Vives*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1970. Trad. española. por Antonio Pintor Ramos, Madrid, Paulinas, 1978.
- : *A Vives Bibliography*, Lewiston, The Edwin Mellen Press, 1990.
- ORTEGA Y GASSET, José: “Vives”, en *Obras Completas*, vol. V, Madrid, Alianza 1983, pp. 493-507.
- : “Juan Vives y su mundo”, en *Obras Completas*, vol. IX, Madrid, Alianza 1983, pp. 507-543.
- PINTA LLORENTE, Miguel y PALACIOS, José M.: *Procesos inquisitoriales contra la familia judía de Luis Vives*, Madrid, C.S.I.C., 1964.
- RIVERA, Enrique: “El tema de paz en Erasmo y Vives frente a la escuela de Salamanca”, en *El erasmismo en España*, ed. de Manuel Revuelta Sañudo y Ciriaco Morón Arroyo, Santander, Sociedad Menéndez Pelayo, 1986, pp. 375-391.
- : “El agustinismo de Juan Luis Vives”, en *Cuadernos salmantinos de filosofía*, vol. XIII, Salamanca, Universidad Pontificia de Salamanca, 1977, pp. 99-111.
- : “Prólogo” para la traducción española de *De la condordia y de la discordia. De la pacificación*, Madrid, Paulinas, 1978.
- 安藤真次郎「ヨーロッパにおけるビーベス像の変遷——文献学的見地から——」『REHK』第4号 (1996) pp. 55-68。
- アンヘル・ゴメス＝オルティグエラ『ルイス・ビーベス——哲学者の責務——』——バレンシア州政府文化省研究叢書——木下 登訳 全国書籍出版 1994 年。
- 伊藤不二男『ビトリアの国際法理論』有斐閣 1965 年。
- 小林博英「ヴィーヴェスに於ける実学思想の発端——自然概念と方法論を中心にして——」『教育学研究』第28巻 (1961)。
- 「ビーベス——近代教育思想の先駆者——」『現代に生きる教育』叢書第7巻 ぎょうせい 1982 年。pp. 43-83。
- 松隈 清『国際法史の群像』酒井書店 1992 年。pp. 39-94。
- 佐々木 孝「内側からビーベスを求めて(一)」『東京純心女子短期大学紀要』第4号 (1991) pp. 13-23 ; 「内側からビーベスを求めて(二)」同書 第5号 (1992) pp. 1-14。
- 「スペイン的《生》の思想」『スペイン黄金世紀』NHK 出版 1992 年。pp. 87-134。
- ビトリア『人類共通の法を求めて』佐々木 孝 訳「アンソロジー新世界の挑戦6」岩波書店 1993 年。

〔付記〕本稿は平成7年度南山大学パッヘ研究奨励金助成による研究である。